

## 国語の教科書から

昭和の団塊の世代と言われた年代の私にとつて、今でも決して忘れることのできないというか、以後、自らの人生訓としてきた国語の教科書に載っていた狂歌がある。

「世の中は何の糸瓜と思へども、

ぶらりとしては暮らされませず」

授業中、この狂歌を目の当たりにしたとき、まだまだ幼稚な若造が、些か生意気であったかもしれないが、「言い得て妙」と深く感銘した。失礼ながら、狂歌に関する当時の授業内容は、一切記憶に無いが、自宅までの下校途中、この狂歌だけは何度も復唱して帰ったことはよく憶えている。努力を惜まずに、という生き方が出来ず不得手で、要領ばかりが先走つてしまう自分の生き方への警鐘でもあった。

何もしないということでは、何も始まらない。本学の「伝統は立ち止まらない」ではないが、常に前向きな姿

勢が大事であることは言うまでもない。しかしながら、人見知りで引つ込み思案、この消極的な性格のため、人生どれぐらい損をしてきたのか計り知れない。

唯一、ひとつの光明を得たのは、十代後半でのコンピュータとの出会である。半世紀以上も前のことになるが、機械語やアセンブラー、コンパイラ言語でも精々フオートランとコボルといった、この時代のプログラム言語との出会いが、その後の人生の礎となった。大学の教員生活も、通算して四十年を優に超えた。そろそろ「ぶらりとして暮らしたい」ものがある。

